

## 愛知教育大学におけるグローバル人材の育成の取り組み — タイからの招聘研究者を人的資源として —

稲葉 みどり

日本語教育講座

### AUE Global Human Resource Development 2011

Midori INABA

*Department of Teaching Japanese as a Foreign Language, Aichi University of Education, Kariya 448-8542, Japan*

#### 要 約

本学では平成23年度に招聘した研究者の一人であるタイ人日本語教師によるタイの国・文化・言語・日本語教育等に関するプレゼンテーションを企画した。現在日本の大学にはグローバルに活躍する日本人材の育成が求められている。グローバル人材に必要なとされる素質・知識・能力には、社会人としての基礎的能力に加え、外国語によるコミュニケーション能力、海外との文化、価値観の差異に対する興味・関心等が含まれている。この企画はグローバル人材育成への大学への期待に応えるものの1つで、日本語教育コースの授業、イメージ・ルーム活動、公開授業等を通じて全学に向けて実施した。本稿では、この企画の概要とプレゼンテーション後に参加学生等から収集した感想レポートの内容を分析し、その結果、異文化理解の促進、海外日本語教育事情の知識の修得、日本語教育に関する専門知識の拡充、異文化コミュニケーション力の伸張、外国語学習への興味付け、キャリア意識の向上、外向き志向への刺激という面で幾分ではあるが効果が見られたことを報告する。

**Keywords:** グローバル人材、日本語教育、異文化理解、キャリア意識、タイ

#### 1. はじめに

国際競争の激化の中で、大学にはグローバル人材の育成が求められている。事業活動のグローバル化に伴う人事戦略として、国籍にかかわらず優秀な人材を採用・活用する動きに対応していくため、グローバル人材育成に向けて、産学官連携による様々な取り組みが進められている。その中で大学に求められる取り組みには1) 幅広い視野や基礎的思考力を重視したリベラル・アーツ教育の拡充、2) 大学の第三者評価の拡充、教育情報の自主的公開、きめ細かい学生支援による大学教育の質保証、3) 海外からの優秀な留学生受入れ拡大や海外大学との連携強化による多彩な交換留学プログラムの提供による国際化推進、4) 世界を牽引するリーダーとなる高度人材の育成等がある。

これらの取り組みを愛知教育大学の教員養成や現代学芸課程を柱とした教育学部の教育理念の下に位置づけると、内外の高等教育機関や教育現場とその周辺でリーダーとして活躍できる高度教育グローバル人材の

育成となる。具体的な施策の1つとして、愛知教育大学では、平成23年度に海外より8名の研究者を招聘し、日本語教育講座ではタイと中国より2名を受け入れた。そのうちの一人のタイからの研究者(N氏)は、日本語教育を専門とし、タイの大学で日本語を教える20代半ばの日本語教師で平成23年10月中旬に来日した。

そこで、この研究者を人的資源と考え、最大限に活用し、本学の学生、教職員を含めたキャンパスのグローバル教育を展開する企画をした。N氏の協力を得て、タイの文化や社会、日本語教育、タイ語の紹介等を中心としたプレゼンテーションの授業(活動)を合計7回企画して実施した。

日本語教育コースの専門授業(日本語教育学概説・対照言語学Ⅱ・日本語教育実践研究Ⅱ)、及び、イメージ・ルーム活動等の時間にプレゼンテーションを設定し、さらに公開授業として全学から参加者(学生・院生・留学生・教職員)や見学者を受け入れた。

本稿では、これらの授業の概要を紹介し、プレゼンテーションによる授業の実施後に参加学生等から収集

した感想レポートの内容を分析し、海外との文化、価値観の差異に対する興味・関心等が高まり、異文化理解が促進されたか、海外日本語教育事情の知識を修得したか、日本語教育に関する専門知識は拡充したか、異文化コミュニケーションの楽しさに気づいたか、外国語学習への興味は高まったか、日本学生の外向き志向へ刺激を与えたか、キャリア意識を向上したか等の観点から考察する。

## 2. 研究の背景

### 2.1 グローバル人材に求められる能力

日本経済団体連合会の「グローバル人材<sup>1</sup>の育成に向けた提言」(2011年6月14日、p. 2)では、日本は「人材力」を強化し、技術力、イノベーション力を高め、成長するアジア市場や新興国市場の需要を取り込んでいく必要性が重要視されている。日本人が歴史的に育んできた逆境にあっても粘り強く取り組み、秩序を守って行動するという国民性・国民性は維持しつつ、今後は、多様な文化、社会的背景を持つ人々と協力し、国際的なビジネスの現場で活躍できる「グローバル人材」を育成し、活用していくことが求められている。

日本企業542社を対象とした「グローバルに活躍する日本人材に求められる素質、知識・能力(複数回答)」の調査結果<sup>2</sup>では、「既存概念に捉われず、チャレンジ精神を持ち続ける」が77.3%で第1位を占める。「外国語によるコミュニケーション能力」が67.9%で第2位、「海外との文化、価値観の差に興味・関心を持ち、柔軟に対応する」が59.2%で第3位である。続いて、「企業の発展のために、逆境に耐え、粘り強く取り組む(48.9%)」「当該職種における専門知識(44.2%)」「個別企業の利益を越えて、進出先地域・国の繁栄を考える高い公共心、倫理観を持つ(11.4%)」「日本文化・歴史に関する知識(4.1%)」「その他(2.0%)」の順となっている。この結果から、グローバル人材に産業界が求める素質、能力として、社会人としての基礎的能力に加え、既存概念に捉われず、チャレンジ精神を持ち続ける姿勢、外国語によるコミュニケーション能力、海外との文化、価値観の差異に対する興味・関心等が重要であることが分かる。

従来から日本企業では同僚や顧客と協力しながら商品やサービスを創りあげていく必要性等から、「コミュニケーション能力」、「主体性」、「チームワーク・協調性」等は重視されてきたが、この調査結果を見るとグローバル人材に求める素質、能力としては、社会人としての基礎的な能力に加え、日々変化するグローバル・ビジネスの現場で、様々な障害を乗り越え、臨機応変に対応する必要性から「既存概念に捉われず、チャレンジ精神を持ち続ける」姿勢、さらに、多様な文化・社会的背景を持つ従業員や同僚、顧客、取引先

等と意思の疎通が図れる「外国語によるコミュニケーション能力」や、「海外との文化、価値観の差に興味・関心を持ち柔軟に対応する」ことを同提言では指摘している。

一方、最近の大学生に不足している素質・態度、知識・能力については、「主体性」、「職業観」、「実行力」や「コミュニケーション能力」等を指摘する回答が上位を占めている<sup>3</sup>。グローバル人材に求められる力は教育の場でも教師の資質として欠かせないものであり、ローバル人材育成に関して大学に期待される場所は大きい。

本稿で紹介する取り組みは、微力ではあるが、「海外との文化、価値観の差に興味・関心を持ち、柔軟に対応する」能力や「外国語によるコミュニケーション能力」等に関わる企画と考えている。

### 2.2 これまでの取り組み

本学ではこれまでキャンパスの国際化と学生のグローバル教育に関して様々な取り組みを行い、グローバル人材の養成を積極的に進めてきた。平成17年度より、教育改善推進経費の助成研究「キャンパスの国際化とグローバル・リテラシーの向上(代表者:安武知子)」の下に、キャンパスの国際化と学生の英語運用力の向上をめざしていくつかの企画・実施をしてきた。日本人学生をアメリカの国際交流協定校に派遣し、日本語や日本文化を英語で紹介するプログラムの開発と実施(稲葉2005)、協定校から留学生を招聘して本学で日本語・日本文化の短期研修を行うプログラムの開発と実施(稲葉2006a、2006b、2009)等である。これらのプログラムは、稲葉(2008)で分析した結果、幾分ではあるが、本学の日本人学生のグローバル・リテラシーの向上に効果があったことが認められた。

さらに、平成21年度より愛知教育大学内に「英語イマージョン・ルーム」を開設し、英語コミュニケーション力の養成や異文化理解の促進を進めてきた。このプロジェクトは、「ピア・サポーター」として英語を話すことのできる留学生、帰国子女、留学経験者等の協力を得ながら、英語を使ってコミュニケーションをすることにより、学生の英語運用力の向上とともに相互交流を促進するもので、将来、学校現場や地域において指導的役割を果たす人材養成に寄与する人材の育成をめざしている。稲葉(2010、2011)では、英語イマージョン・ルームの今後の充実の方策や可能性を検討した。平成23年度からは、英語だけでなく様々な言語や異文化紹介等の活動を取り入れた「イマージョン・ルーム活動」として、異文化理解に関するプレゼンテーションや様々な外国語活動を取り入れた全学向けの行事や活動を提供している。

今回のタイに関するプレゼンテーション企画も2回は「イマージョン・ルーム」の活動の一環として位置

づけ、全学の学生や教職員を対象に実施した。

### 3. 研究の方法

#### 3.1 タイ人日本語教師（研究者）のプロフィール

タイ人日本語教師（N氏）は、平成23年度に愛知教育大学が招聘した研究者の1人で、所属は本学の協定校のタイラチャパット・ラチャナカリン大学である。滞在期間は平成23年10月15日から11月22日までの約5週間である。日本語教師であると同時に、タイの大学院の修士課程においてタイ人のホームステイ文化交流プログラムに関わる様々な課題について研究している。日本語教師歴は約4ヶ月で、日本語教師になる前には現地で日本語の通訳として貿易会社に勤務した経験を持っている。

本学には平成23年度には同大学から3名の特別聴講学生が来日している。また、同大学には、日本語教育コースの学生が日本学生支援機構のインターン・シップ制度を利用して夏休みに訪問し、日本語教育の実践をしている。現地での日本語教育に関する指導を受け、来学前から面識のある学生もいる。よって、本学とは非常に交流が盛んな大学の1つからの来学者である。

#### 3.2 授業・活動、及び、テーマの概要

5週間の滞在中にN氏によるタイに関するプレゼンテーションを7回実施した。プレゼンテーションは、日本語教育コースの授業、イマージョン・ルーム活動、留学生の補講授業等の場を利用して行った。実施にあたっては、学務ネットにより全学（学生・教職員）に周知し、公開授業として通常の履修生以外にも参加者、見学者を受け入れた。以下は実施した授業・活動とプレゼンテーションの中心テーマである。なお、プレゼンテーションには一部重複する内容もあるが、異なる受講者により多くの情報を提供するためである。

- (1) 「日本語補講中級総合B」の授業  
内容「タイの地理・気候・文化・祭り・格闘技」  
対象 本学留学生・（公開授業）  
日時 2011年11月1日（火）2限
- (2) 「日本語教育コース・稲葉ゼミ」  
内容「タイの日本語教育の現状と課題」  
対象 日本語教育コース4年生  
日時 2011年11月2日（水）1限
- (3) 「イマージョン・ルーム活動」  
内容「タイの紹介・日本語学習を取り巻く環境」  
対象 全学  
日時 2011年11月2日（水）3限
- (4) 「日本語教育学概説」の授業  
内容「タイの日本語教育と日本語教師の苦勞」

- 対象 日本語教育コース1年生・全学  
日時 2011年11月10日（木）4限
- (5) 授業「日本語教育実践研究Ⅱ」（公開授業）の授業  
内容「タイ語学習とタイ人に難しい日本語の特徴」  
対象 日本語教育コース 3・4年生・全学  
日時 2011年11月15日（金）3限
  - (6) 「対照言語学Ⅱ」（公開授業）の授業  
「タイ語と日本語の対照・タイ料理と試食」  
対象 日本語教育コース2年生・全学  
日時 2011年11月1日（火）2限
  - (7) カントリー・レポート発表会  
内容「タイの紹介とタイ人の日本語学習の背景」  
対象 全学  
日時 2011年11月15日（火）5限

#### 3.3 感想レポートの収集

参加学生等には授業の感想レポートを書いてもらった。プレゼンテーションを聞いて、「新しく知ったこと」「興味・関心を持ったこと」「質問や疑問に思ったこと」「発表者へのコメント」「タイ語やタイ語の学習について」等の項目を設け、それに自由に記述する形式である。併せて所属と学年も記述してもらった。

合計152名分の感想レポートを収集した。本研究ではこれらの感想を質的に分析し、以下の点を中心にこの企画の効果を考察する。

- (1) 異文化理解が促進されたか
- (2) 海外との文化、価値観の差異に対する興味・関心等が高まったか
- (3) 海外日本語教育事情の知識の修得したか
- (4) 日本語教育に関する専門知識の拡充したか
- (5) 異文化コミュニケーションの重要性を認識したか
- (6) 外国語学習への興味は高まったか
- (7) キャリア意識を向上したか
- (8) 日本学生の外向き志向へ刺激を与えたか

### 4. プレゼンテーションと感想の分析

#### 4.1 「日本語補講中級総合B」の授業

N氏の最初のプレゼンテーションは留学生を対象とした日本語補講のクラスで実施した。内容は「タイの地理・気候・文化・祭り・格闘技」である。

最初にタイを紹介する約8分間の映像を見せながら、生活、仏教、民族、伝統、史跡、祭り等を説明した。留学生の多くがタイに行ったことがなかったのでタイの映像を見て建物・自然・民族衣装等の美しさに感動していた。

次に、タイの国旗の説明、首都バンコクの正式名称、地理、地形、気候、果物、料理等を紹介した。タイの国旗の青は王、白は宗教、赤は民族を表すという説明

を留学生達は熱心に聞き入っていた。「タイ料理はどれも辛いものばかりか」「辛い料理もあるか」等の質問も出た。

タイの踊りを踊ってほしいとのリクエストが出ると、N氏の教え子でもある留学生によりタイの踊りが披露された(図-1)。

最後にタイの伝統的な格闘技ムエタイ(ボクシング)の映像を見た。N氏はムエタイの練習経験があったので、全員でムエタイの基本的な動きを練習した。

感想レポートから、留学生は「国旗の色に意味あること」「タイの国旗の意味」「タイの人口、地理、地形」「タイの地理や隣接する国々」「タイの気候(雨期、乾期、暑期)」「タイの都の正式名称が長く、天使の都という意味であること」「ムエタイ」「タイの景色」「ムエタイの方法」等を学んだことが分かった。

興味を持った点は、「チェンマイのイーベン祭り、コムローイ」「料理(トムヤンクン・グリーンカレー)」「タイの仏教の種類や教義を知りたい」「タイの踊りについてもっと知りたい」等で、「タイの料理やお祭りの紹介が楽しかった」「タイはきれいな国で料理がおいしそうで食べたくなった」「仏像も素敵」「お寺も行きたい」「ムエタイという格闘技はすごいスポーツである。技術が必要」等の感想も見られた。

#### 4.2 ゼミ生対象のプレゼンテーション

日本語教育コースの4年生を対象としたゼミのクラスでは「タイの日本語教育の現状と課題」に関するプレゼンテーションを行った。参加学生は4名で、タイの日本語教育機関の紹介、日本語学習の動機、社会的背



図-1: タイからの留学生によるタイの踊りの披露



図-2: ムエタイ(格闘技)の動きの練習

景等を紹介した。また、日本語教師の待遇や給料、教師としての苦勞、日本語教師や教材の不足等の日本語教育が抱える課題を提示した。このクラスは少人数なので、日本語教授法等に関するさらに詳しい質疑応答が行われた。外国語教授法、1クラスの構成人数、教科書、練習の方法等日本語教育に関する質問が出された。その後、N氏が自分の研究テーマを紹介した。学生も各自の卒業研究を紹介し、N氏が質問やコメントをした。

感想レポートを見ると、新しく学んだこととして、「タイの人が日本のアイドル、アニメ、ゲームに興味を持つことが日本語を学ぶきっかけになっていること」「タイでは日本語教師が不足していること」「タイの高校で日本語が教えられていること」「通訳や翻訳の仕事より日本語教師の給料が低いこと」が挙げられた。発表に対して、「タイではどのような教授法で日本語を教えるのか」「タイの高校や大学では1日のどのぐらい日本語を勉強するのか」「日本語教員1名に対する学生の人数は」「タイ語と日本語の大きな違いは何か」等の質問が出た。タイ語には日本語の「マ行」「パ行」の発音がないが、どの教えるのかという質問も出た。

また、会話を苦手とする学習者が多いことや作文や発音の学習が難しいことを紹介すると、日本における日本語教育と反対であるという意見が出た。日本における日本語教育では、話せるが読み書きが難しい学習者がしばしば見られるからである。また、「漢字指導でどう工夫しているか」等、教育実習や教えた経験のある4年生ならではの質問である。

英語の前置詞、冠詞の習得に関して卒業研究で取り上げている学生が2名いる。N氏がタイ人が英語を勉強するときにも前置詞や冠詞が難しいことを指摘すると、英語学習で日本人と同じ問題を抱えていることに驚いた。N氏に対しては、「日本語が上手である」「教師として立派で勉強になった」等のコメントが見られた。この4名の学生は全員海外に渡航した経験があるが、タイへ渡航経験はない。「タイへ行って日本語を教えてみたい」という感想を持ったようである。

#### 4.3 イマージョン・ルーム活動

イマージョン・ルームの活動では、「タイの紹介と日本語学習を取り巻く環境」等を中心にプレゼンテーションを行った。イマージョン・ルームの活動は全学学生だけでなく、教職員も対象としている。日本語教育コースの学生(1年生1名、2年生6名、4年生2名)、他専攻の学生(1名)、及び、本学留学生(1名)、その他(1名)が合計12名参加した。

はじめに約8分間の映像を見せタイの紹介をした。その後、タイの日本語教育を取り巻く環境に移った。タイの日本語教育機関を紹介し、高等学校、大学、大学院で日本語専門科があること、日本語を教える日本

語学校や私塾が多くあることを述べた。

次に、タイ人が日本や日本語に興味をもつのは、芸能人、アニメ、漫画、ゲーム等への関心がきっかけであることを指摘した。また、日系企業が多くあり、ガイドや通訳、翻訳等の仕事を得られる機会があることも日本語を学習する理由であると述べた。

日本語学習については、「みんなの日本語」「あきこと友だち」という教科書が使われていること、CDを用いて発音を教えることを紹介した。日本語を学びたい人は多いが日本語を教える教師が少ないこと、原因は日本語教師の給料は翻訳、通訳、ガイド等と比べて低いこと、また、日本人の日本語教師が求められている現状にも触れた。

感想を見ると「タイ人が日本文化や言語に興味を持っていること」「日本語学習の動機がアニメ・漫画に多いのは欧米だけだと思っていた」「タイに日本語専門学校や私塾がある」「日本語専門科の高校がある」「大学に日本語専門科がある」「タイに日系企業がある」「タイの日本語教育の現状」等を知ったことが分かる。

日本語教育に関する様々な質問も見られた。その中でも「日本語を教えるにはどのような資格が必要か(大学卒か大学院卒か)」「日本語は必修が選択か(高校から学ぶが)」「日本語学習者の就職先は」「タイの日本語教師の給料は安い、それでも日本語教師の道を選ぶので、やりがいのある仕事だと思った」等キャリア意識に関わる感想等が出たことは注目すべきである。これから自分の将来を考える2年生らしい質問である。

全体では、「タイでは日本語を学ぼうという意欲がある人が多いという印象を受けた」「とても楽しく聞いた。タイに興味を持った」「日本の良いところはどこか」等の感想が見られた。

#### 4.4 日本語教育学概説

日本語教育コースの1年生対象の専門科目「日本語教育学概説」では、当該科目の内容を鑑み、「タイの日本語教育と日本語教師の苦労」についてのプレゼンテーションを行った。この科目の担当者からはタイでの日本語教育がわかりやすく紹介された。タイ人が日本語を勉強してからの就職先やタイでの日本語教育の問題点も取り上げられた。質問の時間には、学生から多くの質問が出た。タイでの日本語教育に関心を持った学生が何人かいた。学生が海外での日本語教育に関する知識を得るとても有意義な授業であった。さらに、タイの大学での日本語教師の給料がとても安いにも関わらず、タイ人日本語教師が学生のために頑張っていることを聞き、多くの学生が感動していたようであると報告を受けた。

感想から「日本語を高校、大学、大学院、私塾で教えている」「日本語教育を学べる大学院は4校だけ」「タイの大学が二期制である」等、日本語教育機関に関す

る知識が得られたことが分かる。また、日本語教材については、「『みんなの日本語』を1年に1冊の割合で進める」「教科書を日本から輸入すると高い。タイ語版もない」「学習者にとって難しいのは作文、発音、会話」「発音を教えるときはCDを使う」等を知ったようである。日本語教育については、「日本語の発音は簡単だと思っていたが、そうでない」「タ行、サ行の発音が難しい」「日本語学習の動機が歌手、アニメと漫画、文化と観光地、仕事のためである」「日本のアニメ等がタイでも普及し、日本語を学ぶきっかけになるとは驚くべきことだ」等の感想が見られた。

「タイの大学の日本人教師は日本語で教えているのか」「タイ人にとって、濁音は難しいかどうか」「テレビで日本のアニメを放送しているのが不思議だ」等の質問・疑問も出された。

「日本もタイも仏教だが、お寺が全く違う」「タイの人も英語を話すのが苦手」「日本のアニメ等の技術が高いと改めて思った」「タイの料理や観光地」「タイの仏教に興味があった」等に興味を持ったことが分かった。

一年生と対象としたこの授業では、キャリア意識に関わる感想が多く見られた。これから自分の将来を見つめようとしているときにこのプレゼンテーションを聞いて何らかの刺激を受けたと思われる。「自分の将来を考えるとよい機会となった」「海外での日本語教師にとっても興味があった」「自分は国語専攻だが、日本語としての国語についてももっと勉強したいと思うようになった」等の感想や、「タイに教育実習に行ってみたい」「日本語ネイティブの先生が必要そうなので、就職したら大切にしてもらえそうだ」等、若者の海外への興味や関心を高めたことを示唆する感想も見られた。

「タイでは80%以上の人が日本語教師ではなく通訳になる。しかし、給料が安くて生活が大変なのにも関わらず、生徒のために一生懸命に頑張っているN先生の姿に感銘を受けた。私もそんな先生になりたい」という力強い意思も見られた。

#### 4.5 日本語教育実践研究Ⅱ

日本語教育コース3年生、4年生を対象の日本語教育実践研究Ⅱの時間には「タイ語の学習とタイ人に難しい日本語の特徴」についてのプレゼンテーションを実施した。イマージョン・ルーム活動と共同開催とし、公開授業としたので、日本語教育コースの1年生20名、3、4年生、15名、非常勤講師、大学院生、留学生を含め、50名程度の参加者があった。

まず、タイ語の学習では音声を中心とした説明をした。44文字のタイ語の文字(表記)と個々の音声を紹介し、全員で発音練習をした。母音が32個あることを知って参加者の多くが驚きの表情を見せた。

次に、タイ語の声調に関する説明をした。タイ語は

日本語の高低アクセントとやの英語のイントネーション、強弱アクセントとは異なる体系をもつことを紹介すると、音声学担当の非常勤講師の方から質問が出た。

さらに、タイ語の文法体系についても言及した。語順がsovという日本語の語順でなくsvoの語順で、英語に類似していること、助詞はないこと、しかし、形容詞は名詞の後に置かれ(かばん赤い)、日本語とも英語とも異なること等を説明した。

難しい日本語の特徴として、発音面では、日本語の「サ行」「タ行」の発音が難しいこと、「橋、端 箸」の高低アクセントの聞き分けや使い分けが難しいことを指摘した。類義語「掴む」と「握る」等の区別が難しいことを述べ、違いを日本人学生に質問した。様々な説明が返ってきたが、明確な回答は得られず、学生は改めて日本語の難しさを実感した。最後のタイの歌手や芸能人、結婚式の衣装等が紹介され、参加者は美しい映像や歌声に癒やされた。

感想を見ると、「タイ語の文字・タイ語の読み方」「タイ語には受動態がない」「助詞がない」「高低アクセントではなく声調で区別をする」「タイの文字は少ないと思ったが、母音が多くて聞き分けが難しいと思った」等に興味を持ったようである。

タイ語に関して「文字の書き順はあるのか」「タイ語にも方言があるのか」「タイ語にあるが日本語にない表現は」「タイ語には尊敬語はあるか」等、上級学年らしい質問も出た。この他、「一緒にタイ語を発音して日本語にない音があって楽しかった」等から、外国語学習の楽しさに気づいた人もいることが分かる。

タイ語と日本語の比較では、「赤い時計・時計赤いは英語語順が違っておもしろい」「タイ語の母音が日本語に比べて多いのに驚いた」「日本語の発音が難しいと言ったが、タイ語を聞いていると『ウ』に似た発音がたくさんありタイ語のほうが複雑で難しいと思った」「言語学をしっかり勉強しようと思った」等の言語に関する感想が多かった。

また、「日本語の難しさが分かった」「日本語の深さを実感した」「その人の国や言語のしくみ、文法等を知っておくとどんなところにつまずきやすいかを理解する手がかりになると思った」等はタイ語学習を通じて日本語を見直す機会を得たことを示唆している。

「似た言葉を普段なんとなく使い分けているでもそのような日本語についてもっと考えてみたいと思った」「私たち日本人が難しいと思ってないところが難しいと感じる部分がおもしろいと思った」「タイ語には助詞がないので使い分けに困ると思った」等、海外経験、実習経験がある3、4年生らしい感想も見られた。

「タイで日本語を教えていて大変なこと」「日本語を勉強していて最も苦労した点」「タイ人にとって難しい発音をどうやって教えるか」「外国人の目線から見た日



図-3：タイ語で発音が難しい音声



図-4：タイのアニメの紹介

本語について聞きたい」等の突っ込んだ質問も出た。

「タイの歌はきれいで日本人の耳になじみやすい」「タイ語の歌の歌詞を知りたい」「なぜ金色の建物や彫像が多いのか」「指の爪を長くするのは意味があるのか」等の感想や疑問から、異文化理解が深まったと考えられる。「タイの人の話を聞くことはめったにないので貴重な機会だ」「来年タイに遊びに行くので情報が得られてよかった」等、外向き志向も観察され、この授業の目的が幾分ではあるが果たせたと思われる。

#### 4.6 対照言語学Ⅱ（日本語補講と合同）

日本語教育コースの2年生対象の専門科目「対照言語学Ⅱ」では、「タイ語と日本語の対照・タイ料理と試食」を中心としたプレゼンテーションを行った。さらに、タイの料理、衣装、アニメ、格闘技（ボクシング）について写真や映像を用いて紹介した。

この授業は、日本語教育コースの2年生と本学留学生の日本語補講との合同授業として行った。さらに、公開授業としたので、他専攻の学生や大学院生、非常勤講師等、約50名が参加した。

はじめに、タイのデザートを紹介、作り方、試食が行われた。薩摩芋にココナツミルクと砂糖を混ぜて作ったものである。N氏がこのデザートを紹介しようと思ったのは、これまでのプレゼンテーションでタイの料理というと皆が「辛い」という強い印象を持っていることを知ったからである。よってタイの料理は辛いものばかりでないことを知ってもらうために甘い食べ物を試食してもらうことになった。ただし、あらまじめ日本人に試食してもらった結果、甘すぎるとのコメ

ントを得たので、この授業では少し甘さを控えて作ったものを試食用に振る舞った。試食した参加者からはおいしいとの声が上がっていた。ココナツミルクを初めて食べた人もいたようだ。「薩摩芋のデザートがおいしかったので、タイの料理に興味を持った」という感想も見られた。

タイ語については、基本的な音声、発音、表記、文法等を学んだ。タイ語と日本語、英語との3つの言語の構造や語順や文法体系の比較、アクセント、イントネーション、声調の比較、文字の紹介、簡単な日常的な表現の練習等盛りだくさんの内容であった。その後、自己紹介や簡単な会話表現を練習した。タイ語に関する講義を初めて受けたという参加者も多かった。

タイ語に対して、「日本語と発音がかなりちがう」「タイの文字の発音はあいうえおより長い」「アルファベットではないので想像で読むこともできず驚いた」等の感想をもったようである。また、タイ語の会話表現に関しては、「タイの名前は長い」「男女で使い分け多くがある」「朝昼と同じ挨拶言葉でよい点（サワデー）」「よろしくおねがいますという挨拶はタイ語にはない」等の点に驚いたようである。タイ語の文字については、「文字の形が絵のようだ」「書くのが難しそうだ」「書き順はあるのか」「文字の形が複雑で覚えるのが大変だ」等の感想が見られた。中国人からは「中国語と似ている感じがする」等の指摘があった。

また、「タイ人が日本語を学ぶときつまずく点が日本人がタイ語を学ぶ時に難しい点だと思った」等の異文化コミュニケーションに関する気づきも見られた。

最後のタイの服装、スター、アニメの視聴、及び、

タイのニュースの一部を紹介した。すると、「タイのアニメの質が予想以上に高い」「X Japanがタイでチャリティーをしたというニュースに驚いた」「タイのスターの風貌」を初めてみた」「タイの合掌のしかたに興味がある」等の感想が見られた。

全体の感想として、「挨拶や自己紹介ぐらいはできるようになりたい」「タイの文化をもっと知りたい」「タイ語を日本人にどうやって教えるか」「実際にタイに行ってムエタイを見たり、タイ料理を食べてみたい」「タイの学校生活や教科、部活動について知りたい」「タイ語が話せたら楽しそう」等の異文化理解や若者の外向き志向への刺激を促すもの、外国語学習を動機づけするような内容の感想も見られた。その他、「授業で見た全てのことが初めて」「今まで何も知らなかったので、全てが新鮮」という感想もみられ、この授業が海外の国について知る重要な機会になったことが示唆された。

#### 4.7 カントリー・レポート発表会

最後のプレゼンテーションは「タイの紹介とタイ人の日本語学習の背景」に関する内容で、主に本学の教職員を対象として行われた。出席者は学長、理事、招聘研究者、教育創造機構教職、大学院生、留学生等を含め20名程度である。

タイの紹介の映像、日本語教育の現状と課題、タイ人に難しい日本語の特徴、タイの料理、ムエタイ等これまでに発表の内容をまとめて発表した。タイのデザートの試食も行われた。学長から積極的な質問がいくつか出され、参加者はタイに関する知識を深めた。



図-5：合同クラスでの質疑応答の様子



図-7：学長との質疑応答



図-6：タイ語の音声表の説明と発音練習



図-8：タイのデザート（ココナツミルクの薩摩芋）

お茶をのみながらフロアとの懇談も進められ、今後のさらなる交流の基盤作りになったと考えられる。

## 5. グローバル人材育成への効果

N氏のプレゼンテーションではタイに関して様々な紹介が行われた。参加した学生の感想レポートから、タイの地理や気候、自然、伝統的な祭り、格闘技、料理、アニメ、漫画等に関して知識を得たこと、さらに、新たに興味を持った様子が見られた。また、日本語とタイ語の比較等から、文化の異なる人々の言葉や考え方、習慣の差異を学んだことが分かった。よって、海外との文化、価値観の差異に対する興味・関心等が高まり、異文化理解が少しではあるが促進されたのではないかと考える。

プレゼンテーションでは、タイの日本語教育機関の紹介、日本語学習の動機、日本語学習の目的、就職先、日本語教師の待遇等が具体的に紹介された。それに対して参加学生からは活発な質疑応答がされた。感想レポートにもタイの日本語教育やタイ人の日本語学習に関して情報を得た旨の記述が多く見られた。よって、海外日本語教育事情の知識を修得したと考えられる。

またN氏から直接タイでの日本語教育現状や課題、日本語教師の苦勞について聞くこと、さらに、日本語教授法や日本語教材に関して知ること、日本語教育に関する専門知識は拡充したのではないと思われる。

感想の中には、タイについて聞くのは初めてであり、プレゼンテーションの内容全てが新しく知ったことであるという記述も何件が見られた。そして、プレゼンテーションの授業が非常に楽しかったと述べている。よって、異文化を学び、異文化に触れることで、異文化コミュニケーションの楽しさに気づいた学生が何人かいるのではないと言える。

タイ語の紹介や学習体験はほとんどの参加者が初めてだったと思われる。難しいと感じた人、おもしろいと感じた人、話すのが楽しいと感じた人等感想は様々であるが、外国語学習への興味は高まったのではないと思われる。

タイへ教育実習に行ってみたい、タイに興味を持った等の記述が非常に多く見られた。また、タイで教えてみたい、タイの日本語教育について知りたい等の感想も見られ、この企画を通じて少しではあるが日本人学生の外向き志向へ刺激を与えたと考えられる。

特に1、2年生からは、自分の将来を考えるととてもよい機会となった、海外での日本語教師にとっても興味があった、自分は国語専攻だが、日本語としての国語についてももっと勉強したいと思うようになった等の将来を見つめる感想が見られ、キャリア意識を持つきっかけになったと思われる。

よって、本企画は異文化理解の促進、海外日本語教育事情の知識の修得、日本語教育に関する専門知識の拡充、異文化コミュニケーションの重要性、外国語学習への興味を高め、キャリア意識を向上させ、外向き志向への刺激という面で幾分ではある貢献できたと信じている。

最後に、タイでは日本語教師の待遇は決してよいとは言えないが、貿易会社の通訳や翻訳の仕事を辞して、大学院に進学し、日本語学習者のために一生懸命に頑張っているN氏の姿、そして、ここで紹介したプレゼンテーションを参加者のために毎回準備し、バージョンアップして発表するN氏の努力姿勢が多くの人々に感銘を与え、タイと本学の国際交流の推進に大きな役割を果たしたと思う。

## 注

- <sup>1</sup> この提言ではグローバル人材を「日本企業の事業活動のグローバル化を担い、グローバル・ビジネスで活躍する（本社の）日本人及び外国人材（p. 7）」
- <sup>2</sup> 日本経済団体連合会「グローバル人材の育成に向けた提言」資料編（2011年6月14日）資料編、図1、p. 2）
- <sup>3</sup> 日本経済団体連合会「産業界の求める人材像と大学教育への期待に関するアンケート結果」（2011年1月18日）

## 謝 辞

ここで紹介した企画は、研究者として来学したタイのN氏をはじめ、国際交流センター職員の方々、日本語教育講座教員の方々、非常勤講師の方々、学生、参加者の方々のご協力を得て実施することができました。この場を借りて厚く御礼申し上げます。

## 参考文献

- 稲葉みどり（2005）. 「米国における教育実習プログラムの成果と充実の方策」『教育実践総合センター紀要』8号. pp. 145-156.
- 稲葉みどり（2006a）. 「日本語・日本文化短期研修プログラムの開発と実践」『教育実践総合センター紀要』9号. pp. 35-42.
- 稲葉みどり（2006b）. 「自己発信型の日本語力の養成—体験密着型のオリジナル教材を活用して」『教養と教育』6号. pp. 17-26.
- 稲葉みどり（2008）. 「国際交流と学生のグローバル・リテラシーの向上—アンケート調査による効果の分析」『教育実践総合センター紀要』11号. pp. 33-40.
- 稲葉みどり（2009）. 「『日本語・日本文化短期研修プログラム』の整備・充実と今後の方向性—試行4年間を振り返って」『教育実践総合センター紀要』12号. pp. 87-94.
- 稲葉みどり（2010）. 「英語イマージョン・ルームの開設—プロジェクト—の役割と今後の可能性」『教育実践総合センター紀要』13号. pp. 37-44.
- 稲葉みどり（2011）. 「英語イマージョン・ルームの活動—自律的な異文化交流の推進」ウェブマガジン『留学交流』8号.

## 資 料

- 日本経済団体連合会「グローバル人材の育成に向けた提言」  
(2011年6月14日)
- 日本経済団体連合会「グローバル人材の育成に向けた提言」資  
料編 (2011年6月14日)
- 日本経済団体連合会「グローバル人材の育成に向けた提言」概  
要 (2011年6月14日)
- 日本経済団体連合会「産業界の求める人材像と大学教育への期  
待に関するアンケート結果」(2011年1月18日)